

昭和二十九年十二月十日 初版印刷
昭和二十九年十二月十五日 初版發行

昭和文學全集50
和辻哲郎集



著者 和辻哲郎

發行者 角川源義

印刷者 中内佐光

東京都千代田區飯田町一ノ三

發行所

株式會社

角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七

振替東京一九五二〇八
電話九段〇二一〇二四

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロス工業株式會社
印刷所 曉印刷株式會社
製本所 鈴木製本社



和辻哲郎
昭和二十四年四月(六十歳)
吉川富三撮影

和辻哲郎集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞
筆蹟

イタリヤ古寺巡禮

一出發

- 一 イタリヤに入る 九
- 二 ローマ滞在 九
- 三 ナポリとその附近 二七
- 四 シナリアの春 三
- 五 アシシの壁畫 三
- 六 フィレンツェ滞在 四〇
- 七 ボローニヤ、ラヴェンナ、パドヴァ 五
- 八 ヴェネチアに病む 六

鎖國 日本の悲劇

序説

前篇 世界的視圈の成立過程

- 第一章 東方への視界擴大の運動 六
- 一 東方への衝動・マルコポーロとその後繼者 六
- 二 航海者ヘンリ王子の理念 九

- 三 パスコ・ダ・ガマによる實現 一〇
- 四 インド洋制海權の爭奪 一六
- 五 インド征服 二〇
- 六 マラッカ征服 二三
- 七 植民地攻略 二三
- 八 未知の世界への觸手・キリスト教傳道 二六

第二章 西方への視界擴大の運動

- 一 コロンブスの西への航海の努力 二八
- 二 コロンブスの第二回及び第三回航海 二四
- 三 アメリゴ・ヴェスプッチの新大陸發見 二六
- 四 征服者たちの活動 二六
- 五 メキシコ征服 二八
- 六 ペルールの發見 二九
- 七 インカ帝國 二九
- 八 インカ帝國の征服 二九
- 九 太平洋航路の打開とフィリッピン攻略 二六

後篇

世界的視圈における近世

- 初頭の日本 二六
- 第一章 十五・六世紀の日本の情勢 二六

- 一 倭寇 一六
- 二 土一揆 一八

第二章 シヤビエルの渡來

- 一 ヤジローとの邂逅 一九
- 二 鹿兒島におけるシヤビエル 一九
- 三 山口におけるシヤビエル 二〇
- 四 豊後におけるシヤビエルと大友義鎮との接觸 二〇

第三章 シヤビエル渡來以後の十年間

- 一 トルレスと山口の教會 二四
- 二 豊後における教會の建設 二七
- 三 シヤビエルの死と日本への關心の高揚 二八
- 四 山口の教會の活動とその受難 二九
- 五 豊後の教會の成長、慈善病院の經營 三二
- 六 トルレスとビレラ、平戸の教會 三三

第四章 ビレラの畿内開拓

- 一 ビレラ京都に來る 三七
- 二 堺における一年間 三九
- 三 結城山城守の招請 三〇
- 四 河内飯盛地方の開拓 三三
- 第五章 九州諸地方の開拓 三三

一 基地——豊後の教會 二三

二 平戸附近諸島の開拓 三四

三 ダルメイダの薩摩訪問 三七

四 横瀬浦の建設 三七

五 島原半島の開拓 三二

六 大村純忠の受洗 三三

七 横瀬浦の没落 三三

八 口の津と平戸 三三

第六章 京都におけるフロイスの活動 三七

一 フロイスとダルメイダの上京 三七

二 日本文化の觀察 三九

三 將軍暗殺と宣教師追放 四三

四 京都回復の努力 四五

第七章 九州北西沿岸地方における布教の成功 四七

一 福田の開港 四七

二 キリシタン武士たちの努力 四八

三 ダルメイダの五島、天草及び長崎の開拓 四九

四 トルレスの最後の活動——大村の會堂と北九州の政治的情勢 五三

第八章 ルイス・フロイス——和田惟政——織田信長 五五

一 フロイス信長に會ふ 二五

二 フロイスと朝山日乗との衝突 二六

三 追放繪旨の效力問題——日乗と惟政との對立 二六

四 フロイス岐阜に信長を訪ふ 二六

五 日乗の惟政排斥運動、日乗の失脚 二六

六 戦亂に對するフロイスの方針と惟政に對する讚美 二六

第九章 信長の傳統破壊 二六

一 本願寺との敵對、叡山燒討 二六

二 信長の危機、京都の攻圍戰 二六

三 將軍の没落、淺井朝倉の滅亡、傳統破壊者の勝利 二七

第十章 京都の新會堂『昇天の聖母』の建立 二七

一 新會堂の計畫とその主動者たち 二七

二 建築工事と村井貞勝の外護 二五

三 新會堂の効果 二七

四 信長一門の同情 二六

五 部將たちの同情、佐久間信盛と荒木村重 二六

第十一章 キリシタン運動の最高潮 二六

一 信長の鐵砲隊と艦隊 二六

二 荒木村重の背叛と高山右近の去就 二六

三 安土宗論 二六

四 巡察使ワリニャーニの渡來 二七

五 石山本願寺の開城、安土城の完成、安土のセミナリヨの開設 二八

六 ワリニャーニの京畿地方巡察 二八

七 大友宗麟の受洗 二九

八 ローマへの少年使節 二九

第十二章 鎖國への過程 二九

一 信長殺さる 二九

二 キリシタン大名の繁榮 二九

三 秀吉の宣教師追放令 三〇

四 キリシタン迫害史 三〇

五 鎖國 三三

隨筆 鷗外の思ひ出 三〇

小説 健陀羅まで 三三

解説 古川哲史 三六

著作解題 三六

年譜 三六

和辻哲郎集

荷葉團々團々如

鏡菱角尖々尖

如錐

和辻哲郎

イタリア古寺巡禮

一出發

一九二七年十二月十九日、パリにて。

Hはロンドンから歸つて來た。別にさはりもなかった。しかし醫者は早く日本へ歸つて療養するやうにすすめるので、豫定よりも早く一月九日ナポリ發の鹿島丸で歸ることにした。そんなわけで南フランスからイタリアといふ風に暖かい地方だけしか見物が出來ない。大分がつかりしてゐる様子で氣の毒だ。それに病後の一人旅は心細さうだから、ローマまでついて行くことにする。

一昨土曜日にはHを案内してルーヴルを一廻りし、それからトーマス・クックへ行つてローマまでの切符を買つた。フランスの國內は二等、イタリアへはいつてからは一等といふことにして七百四十五フラン、六十圓餘りに當る。日本の國內で少し遠いところへ行くやうな感じである。

クックを出てからエトワールの附近の常盤といふ日本料理屋へ行つて夕食をしたが、もう歸らうとしてゐた時に、京都の濱田さんが田中豐藏君や小島祐馬君と一緒にやつて來ら

れるのに逢ひ、またひき返して話し込んだ。濱田さんは前日の晩にパリに着き、偶然、田中君のあるホテルに泊まれたので、すぐわれわれの消息も解り、田中君からは私のところへハガキを出してくれたとのことであつた。濱田さんはスウェーデンの皇太子のところに滞在して來られたので、その皇太子の家庭生活の話が非常に面白かつた。宮殿への出入が極めて自由であるばかりでなく、宮殿内の生活がまことに簡素で、晝食などは給仕なしのセルフ・サービスだといふ。さういふなごやかな雰囲気のおかげで何の拘りもなく日本の客を取り入れ、太子妃も姫たちも氣持よくもてなして呉れた、といふことを、濱田さんは心から賞讃してゐられた。皇太子の有名な蒐集品の話よりもむしろこのことの方が熱心であつた。

パリも四五日前からひどく寒くなつて來たが、特にこの日の寒さはひどかつた。體が縮み上つてしまふくらゐだつた。あとで聞くと零下六七度以下つてゐたといふ。田中君はこの晩風邪をひいて、翌日は三十八度ほど熱を出し、寝込んだとのことであつた。パリの暖房設備はあんまり好くない。窓は一重だし、それも隙間から外の空氣が忍び込んで來るので行つても體が十分には暖まらない。レストランなんかでも寒い。Hは病氣上りのせいでひどくこたへると見え、早く南へ行かうといふ。

私もこれには賛成で、ニスあたりへ早く漕ぎつきたいと思ふが、しかし妙なもので、零下三四度から五六度位の空氣のなかを歩いてゐても、その苦しさは日本の冬と大差はない。現に私は日本で着てゐたと同じだけ着込んで済ましてゐる。違ふところはやはり生活の様式だと思ふ。日本で外の寒いところから家へ歸つて來て、炬燵に足を突込んだり、風呂へ飛び込んだり、湯氣の立ち上る寄鍋を食つたり、とにかく日本の普通のやり方で、體がほか／＼暖まつてくるといふあの氣分は、こちらではどうにも味へない。もつともパリでも裕福な人にもつと暖房を熱くしてゐるのかも知れぬが、われ／＼の泊つてゐる安下宿や、濱田さんの泊つてゐる中流のホテルでは、暖房のスティームはそんなに熱くない。中流の人たちでも家庭を持つてゐれば寒い日にストーヴを焚くとか何とかやれるであらうが、われ／＼にはこのぬるいスティーム以外に全然暖をとる方法がないのである。室の溫度は華氏で五十八度位になつてゐるから、日本の室よりは暖かい。しかし五十八度の氣溫では外で冷えた體は到底暖まらない。室内の溫度は四十度でもいゝから、火鉢か炬燵か、何か直接皮膚に暖を與へるものがほしい。つまり空氣を暖めるといふ暖房の考と、直接體に熱を加へるといふ防寒の考との相違だと思ふ。もつともこんなに寒いことはこちらでも四十年來ないことだといはれてゐる。昨日の朝

はバリでも零下十度位に下り、ベルリンでは零下二十何度とかになつたといふ話だ。さういふ風に例外的な寒さだとすると、こゝの暖房の設備がそれに適應することの出来ないのも當然かも知れない。日本の火鉢がいくらでもと云つても、それは日本が暖かいからで、もし零下十度とか、二十度とかになるとすれば、日本の家ではとてもやり切れないかも知れない。

昨日曜日は、午前中室に引き籠つて、亡父を偲びつゝ、香奠を贈られた方々への御禮狀を書いた。Hは友人のS氏が來てその家へ連れて行つた。

午後には龜井高孝君と一緒にルーヴルへ行き、そこでまたばつたり濱田さんに逢つた。連れ立つて外へ出てカフェにはいり、濱田さんの昔の洋行談を聞いた。十四五年前の話、世界戦争の始まる前から戦争中へかけてのことだ。濱田さんはその時のことを非常になつかしがり、思ひ出の場所を頻りに訪ねたが、つてゐる。若い時に見たヨーロッパは強い感銘を與へたが、今度はさほどではないらしい。夜はHの友人のS氏の招待でオペラに行つた。出し物はファウスト。オーケストラはベルリンほどよくないやうに思はれる。役者は同じ位か、或はこれもベルリンの方がいくらかいゝかも知れない。舞臺裝置は、機械方の利用とか電氣の使ひ方など、明かにベルリン

の方が進んでゐる。しかし色彩の趣味といふ點になると、バリの方が段違ひに好い。色電氣などでも、ベルリンのは太陽の七色のやうな單純な色であるが、バリのはもつと複雑な、滋味のある、氣持のいゝ色調を見せてゐる。衣裳の色でもさうだ。ドイツ人は間色をあまり使はないが、こゝの間色の方が多く、その使ひ方がわりになかしくない。マーガレットをやつたのは Bethou といつて、聲も顔もきれいな女だったが、しかし一番有名なオペラうたではないといふ話だつた。メフィストをやつたのはボルドン、これは中々うまかつた。しかしメフィスト役者ではジュルネーの方が評判が好いといふ。ファウストはオードヴァンといふ役者がつとめた。

ベルリンのオペラには、いろ／＼な氣分がまじつてゐるにしても、なほ音楽をきゝに來たといふ氣分がはつきり出てゐたと思ふ。このオペラでは上流の交際場だといふ氣分の方が強い。もつともそれは私たちが士間にゐたせるかも知れない。土間や二階三階あたりがさういふ風なので、四階五階へ行けばまるで氣分が違ふかも知れない。拍手などでも、熱心なのは上の方から聞えてくる。しかしとにかくこの晩の感じでは、數年前に帝國劇場で見たロシアの旅役者のオペラの方が、ずつと面白かつた。聴衆の態度がそれを示してゐる。こちらでは慣れつきになつてゐるし、出し物も役者も別に目新しいことはないし、

聴衆が何となくだれた氣持になつてゐるのは無理もないと思ふ。しかし帝國劇場の場合には、聴衆がオペラといふものに初めて接するといふ強い緊張を持つてゐた。本當に音楽を聞きに来てゐるのであつて、交際のためとか、お義理を果しにととか、とにかく藝術鑑賞のためでない別の必要で來てゐるのではなかつた。だから舞臺も見物も實際によかつたのだと思ふ。客觀的に比較すれば比喩ものにはならない。背景の大道具は段違ひに大壮掛けだし、役者の數は數倍である。仕出しの兵隊とか町の人とかはうんと大勢出てくる。またさういふ下つ端の役者でもわりに粒が揃つてゐる。帝國劇場のあの舞臺やロシアの旅役者の貧弱なとは到底比較にならない。しかしさういふ點は結局枝葉のことだと思ふ。

今日は午前中に龜井君と一緒に濱田さんを訪ね、連れ立つて大使館に行つた。金を受取つたり、イタリア行を届けたり、いろ／＼用事をすませて、さてそのあとは、晝食から夕食まで濱田さんと話してゐた。これからの旅行の計畫などがおもな話題であつた。

濱田さんはこれから南フランスを廻つてスペインへ行く。先づフランスとスペインとの國境地方でバスカ人の遺蹟や遺物を見、それからスペインへ入つて、三四百年前に榮えた古い町々を見て歩くつもりらしい。その頃日本人として初めてヨーロッパの地を踏んだ九

らない。

十二月二十三日、マルセーユにて。

州諸大名の遣歐使節が、その若々しい心で興味深く眺めたであらうと思はれるその町や山や野の姿を、自分も一度自分の眼で見て置きたいといふのである。その使節たちが旅をして歩いたイタリアの町々は、先年の遊學の際に心ゆくまで見て歩いたが、大戰の勃發のためその時にはスペインを廻る機會が得られなかつた。今度こそは何處を措いてもスペインだけは見のがすわけに行かない。さういふ氣持で濱田さんのスペイン熱は中々烈しいものであつた。

三四年前、木下李太郎君が十分熱心にスペインやポルトガルを廻り、若い頃の南蠻熱を復興したらしい。去年だつたか京都へ來たときは、その方の興味ばかりで、大學の圖書館以外にはどこも振り向かうとはしなかつた。やがて日本にはまたキリシタン物がどしどし現はれてくるであらう。

濱田さんとスペインのことを話してゐるうちに、イタリアへ私たちと同行しようと思つてゐた龜井君は、急に意が動いてスペインへ行くと思ひ出した。私自身もさうしたくなつたが、しかし病後のHを一人だけ突き放すわけには行かない。こゝは辛抱して豫定通りに行動するほかはない。濱田さんはHの船の次の次の船に乗る筈だから、やがてまたローマで濱田さんや龜井君に落ち合ふことにして、明後日、一足先きに出發する。明日は旅の支度をしたり、雜用を片附けたりしなくてはな

ほど感じたことはない。そこで務臺君や龜井君も一緒に四人の人和と荷物とを詰め込んで急いで停車場へ出掛けた。車がすべるかと思つて心配したが、出て見ると當り前に走る。はらはらしたほどのこともなく、汽車にはちやんと間に合つた。

あとで新聞を讀んで見ると、この朝往來が凍つたのは *Perdig* (雨水) といふ奴で、細かい雨が地面へつくと片端から凍り、五分位の厚味のつる／＼した氷でアスファルトの上を一面に覆うてゐるのであつた。ヨーロッパでは氣溫の交錯でかういふ現象が起り易いらしく、パリでも珍らしいことではないさうであるが、しかし二十一日の朝のは「パリの記憶してゐる内で最もひどい *Perdig* の一つである」と書いてあつた。新聞の記事は少し大げさかも知れないが、早朝に外へ出た人は、歩かうとしても、滑つて歩けない。タキシはエンヂンを一所懸命にまはしても、車がからまはりするばかりで、前へはちつとも動かない。馬車は、馬が頻りに足掻いてゐるのに、じつと停止してゐる。地下電車も故障で動かない。郊外から勤め人を乗せてくる汽車は、その勤め人たちが停車場まで歩いて來られないために、半分がらあきでパリへ着く。中央市場へは食料品が着かない。牛乳も來ない。或る生眞面目なイギリス人はその中を無理に歩いて來たが、二マイル歩くのに四時間かゝつた。それも、途中でカフェーへとび込んで、

靴をかり靴を包んで、やつと歩けたのだといふ。普通の靴のまゝで歩けなかつたといふのは本當であらう。タキシの窓からのぞいてみると、ズツクの布で靴を巻いて歩いてゐる人が眼についた。すべつて轉んで、撲ちどころが悪く死んだ女が一人、怪我人は大分あつた、といふのも、パリのやうな大都會だから本當であらう。さういふ騒ぎで、市役所の人夫が出勤して町を歩けるやうにするまで、すべての活動が平常の日より三時間遅れたといふ。私たちはそれほど騒ぎとも知らず、汽車に間に合つてまあ好かつたといふだけで、九時にパリを去つた。

パリからマルセーユへの沿道の景色は、この前に見たのも三月末のまだ木の芽の出ない時だつたので、あまり變りばえはしなかつたが、しかしドイツの國內を歩き廻つて來た眼で見ると、いくらか趣が違ふやうに感ぜられる。こゝは大體フランスの東部で山の多い地方ではあるが、その間にひろがつてゐる平地が、ドイツの中部地方のやうに大きく波の形にうねつてゐるのではなく、幾分傾斜はあるにしても、ほど「平野」らしい感じを持つてゐるのである。従つて山もまたその平野に對してはつきりと山らしく立つてゐる。と云つても日本で見えるやうに平野と山との截然とした區別があるわけではないが、しかしドイツに比べると、よほど日本の感じに近いやうに感ぜられる。さうしてその近さの度合と、野

菜や肉類の味が好くなつてくる度合とが、どうも一致してゐるらしい。それには水も關係して來るであらう。この汽車の走つてゐる筋は、初めの内はセーヌ河の上流に沿ひ、分水嶺を超えると、マルセーユの近くで海に入るローヌ河の上流、ソーヌ河の沿岸へ出る。さういふ風に大河の流域であるため、フランスでも特に豐沃な地方なのかも知れない。どうも山と水との揃つた所でない、うまい食料品は産しないらしい。

途中の景色は相變らず牧場と畑とであるが、その牧場の緑色がドイツのよりも幾分柔かい色調を持つてゐるやうに感じられる。冬でも緑色をしてゐる草の中に混つて、枯れて黄色になつてゐる草が、ドイツよりも多いのではないかと思ふ。南方へ寄つただけにさういふ冬枯れの草のことが考へられるが、しかしこれは例へ寄つて見ないのだから確かなことは云へない。とにかく野原一面の緑色が、鈍い、燻しをかけたやうな、ほんのりとした色で、どうも日本では見たことのない綺麗な色だと思つた。

十二月二十四日、ニースにて。

今夜はクリスマスの前夜で、大きいホテルやキャシノーでは華やかな晩餐會や舞踏會があるらしいが、こゝのホテルは靜かで、一向變りがない。そこで室に引込んで、ストロヴのそばで昨日の續きを書く。

マルセーユへは二十一日の夜九時四十五分に着いた。自動車に乗ると空氣が馬鹿に暖かく感じられる。手袋をはめてゐないでも手がちつとも冷たたくない。これには先づ驚きを感じたが、やがてホテルへ着いて室へ通つて見ると、大きな室にパリの宿の小さい室の蒸氣暖房と同じ大きな暖房設備があるだけであるのに、ねまき一枚でゐても寒くない。何といふ大きい相違だらうと驚かざるを得なかつた。翌日は頸巻などはしないで外へ出たが、パリと同じ身仕度をしてゐると暑くて仕樣がないので、到頭毛のシャツを脱いでコットンコットンの白いシャツ一枚になつた。それで丁度いい位であつた。恐らく陽氣が急變したので、パリでもヴェルグラの日以來暖かくなつてゐるのではあらうが、何分にも變り方がひどいので、南國へ來たといふ氣分を非常に強く味はつた。ヨーロッパの人たちの南國に對する感じ方も、なるほどと解るやうに思つた。

マルセーユへ二度目に来て見ると、初めて船からヨーロッパの地へ上つたときに、いかに自分の氣持が興奮のため上つてゐたかを、しみじみと感じさせられた。勿論印象は初めの方が強いのはあるが、しかし物のけじめがはつきりと見えなかつたのではないかと思ふ。今度落ちついて觀察してみると、マルセーユのつまらなさや面白さが別々に眼に映つてくる。シャヴァンヌの壁畫のある美術館へも行つて見たが、これは一向つまらな

かつた。この春のぼつたノートルダム・ド・ラ・ガードの丘の上へもまたのぼつて見たが、寺の建築そのものは、前の時と違つて、一目で近代の悪作であることが解つた。しかし丘から見おろしたマルセーユの町の姿は、ヨーロッパ中部の町とはよほど違つた趣を持つてゐて、非常に面白かつた。地中海の沿岸にあるといふことは、かなりはつきりした特徴を持つことを意味してゐる。アフリカの沙漠は海を距ててかなり遠くにあるのであるが、しかしそのことをなつい思ひ起させられるほど、何とはなしに熱帯的なものが感じられる。色の調子がよほど明るい。この春初めて見たときは熱帯の町々を見て来たあとであつたためにそれを感じず、今度は薄黒く煤けた陰鬱な色の町から来たためにそれを感じたのであるかも知れぬ。その上、マルセーユに着いた日の翌日は午前、翌々日は午後、雨が降つたのであるが、その雨が、パリと違つて、日本と同じやうな降り方のものであつた。これも南國らしい氣分を起させる有力な原因であつたらしい。

日は商船のエンヂェントに逢ひに行つたので、私はひとりてぶら／＼とノートルダムの傍の丘へのぼり、永い間海を眺めた。それからまたぶら／＼と場末の町を歩いて古い港の入口にある要塞の傍の、サン・ヴィクトルといふ、マルセーユで最も古い寺院を見に行つた。これは最初五世紀頃に出来、サラセン人

に破壊され、十二世紀頃に再建されたものであるが、まるで牢屋と砦とを一緒にしたやうな感じであつた。厚い石の壁、銃眼、上部の胸壁、方形の塔、いかにも物々しい。最初はどうしても寺院だとは思へず、幾度も地圖を見なはした位であつた。マルセーユはギリシア人が開いて以來随分幾度も爭奪的になつたが、この建築の出来た頃は一種の都市國家として榮え、地中海の海運を押へてゐたらしい。第八十字軍の時は軍隊の輸送を一手に引き受けたといはれる。その後イタリアのジェノアやビサの活動で競争に負けつしまつたが、その古い港の盛時にでも寺院をこのやうに武裝する必要があつたと見える。

マルセーユの面白味は港町らしいところにある。各國人がうよ／＼と歩いて居り、自動車、運轉手やホテルのボーイは客から巧みに金を絞り取ることばかり考へてゐる。新聞を賣る十二三歳の子供でさへ、傍へ寄つて來て巧みに新聞を賣りつけて行く。古い港の傍では、牡蠣その他の貝類を往來ばたで賣つてゐる。港に面して魚料理の家も並んでゐる。その内のバックソーといふ有名な家でマルセーユ名物のブイアベースを味はつて見たが、これは汁の多い魚の煮込みといふか、或は魚を入れた濃汁といふか、いづれにしても魚よりは汁が甘い。エキストラのブイアベースを注文したところ、こちのぶつ切りのほかに大きい伊勢えびがはいつてゐた。この伊勢えびはバ

リで食ふと相當に高い。久しぶりでうまい魚が食へたわけだが、しかし正直に云つて、料理は大して上手といふほどでもない。

十二月二十五日、ニースにて。

昨二十四日、十時過ぎの汽車でマルセーユを立つて、三時半頃ニースに着いた。天氣は半晴半曇、途中の景色は中々好かつた。どうも日本の巴にかなり好く似て來たやうに思はれる。山のの形の形であるが、これが中國邊の山を思はせる。堅い岩山で、その岩の肌が白く出てゐて、日本の最もひどい禿山と同じ程度であるが、しかし山の北側は白い肌が所にしか見えない位に緑に覆はれてゐる。さういふ山が、或は陣笠形に圓く、或は折烏帽子形に突ととして、谷の兩側に續いてゐる。谷は山と山との間の「平地」であり、その中央には小さいながら川が流れてゐる。平地には葡萄畑、オリヅ畑、麥畑、牧場などがある。いかにも南國らしいのどかな景色で、フランス國內の最も豐沃な土地の一つといはれてゐるものなるほどと思はれる。もつとも、北方に比べて豐沃なのであつて、伊豆あたりのやうな豊かな氣持では決してない。さういふ景色のなかを、時には海岸へ出ることもあるが、大體は山あひや平地のなかを通つて、三時間あまり走ると、サン・ラファエルといふ町へ出る。そこからは海岸傳ひの狭い通路である。汽車は岩を切り割つた間だ

の、崖の上だのを通つて行く。海岸がずつと下に見える。かうしてカンヌを経てニースへ着いたのであるが、ニースが有名なのはそこに人口十萬ほどの町が出来、大きいホテルやキャシノーやオペラなどがあるからであつて、景色が好いからではない。たゞ景色だけからいへば途中の海岸にいくらもうゝ所があつた。永く滞在するならば町の小さいカンヌの方が好いと思ふ。

ニースへ来る途中で著しく眼についたのはオリヴの木であつた。葉の色は薄い銀色を混へた緑色で、變に美しい。山の木は松の類らしく、葉の色は日本のよりは浅い緑であるが、大體見慣れた感じである。しかるにオリヴの葉の色だけは、白っぽいやうな、妙な感じを持つてゐる。それが景色の中核であるかのやうに、ひどく眼につくのである。日本で例をひくと、若葉の頃に京都の南郊を黄蘗宇治から奈良の方へ汽車で行けば、畑の間の柿の木の新緑がひどく眼につくであらう。丁度あゝいふ工合である。日本では麥畑や茶畑の間の柿の木であるが、こちらのオリヴの木は、たゞ草の生えた地面の上に、二三間の距離を置いて、立ち並んでゐる。老木と見え幹はかなり太いが、高さは一間か一間半位につめてある。丹念に手入れをした庭木のやうな恰好である。この銀緑色のオリヴの木を、日本の柿の木——葉の落ちて枝だけになつてゐる柿の木、或は新緑に輝やいてゐる柿

の木、或は明るく紅葉してゐる柿の木——に比べて考へて見ると、何か非常に示唆的なものがあるやうに感じられる。それらは確かに截然として別趣のものである。ところでその相違は、平生われ／＼が西洋の油繪と日本の花鳥畫や水墨畫との間に感じてゐた相違と、大體同じものであるやうに思はれる。藝術において西洋風があるやうに、こゝの風景はいかに西洋風に感じられる。それは一つはこの景色の中にある建物の様式にもよるであらうが、それよりもこのオリヴの木の印象の方が一層強い契機になつてゐるであらう。

果樹としてオリヴにもつと近いものを持つてくれば、伊豆や國府津あたりの蜜柑の木であるが、あれは緑の色がずつと濃く、また葉の間には明る強い強い蜜柑の色がちらつてゐて、いかにも暖かい感じを與へる。しかしオリヴの色は妙に冷たい感じで、全く印象が違ふ。この地方はさう光線が弱いわけではなく、またこの二三日の経験では雨が少ないわけでもなささうなのに、この緑の色はどうしたことかと思ひに思はれた。もつとも空氣は日本よりもずつと乾燥してゐる。空氣のなかに濕氣が多いといふことは何と云つても日本の特徴であらう。文明國の中では恐らく日本が随一ではないかと思はれる。

この海岸地方からマルセイユの北方アヴィニオンあたりへかけての暖かい地方、つまり

海岸アルプスに近い地方は、古くからプロヴァンスと呼ばれ、ローマやイタリアの影響の最も深くしみ込んでゐるところだ。十三世紀の頃、ルネッサンスの先驅になるトゥルーパードゥールの詩人たちを生み出して有名なプロヴァンスは、もつと廣く南フランス一帯を意味するらしいが、さういふ運動の發祥の地はやはりオリヴの木の繁る狹義のプロヴァンスであらう。中世の陰鬱な雰圍氣がそろそろ明るくなり始めたのは、空の青いイタリアやプロヴァンスからであつた。

ヨーロッパ人はニースの空が青いと云つて喜ぶ。ロンドンからニース行の急行が出て、それに婆さんや娘さんや夫婦者などがどつきり乗つてゐる。バリからも同じく急行が出る。この間マルセイユまで同車したイギリスの婆さんは、やはりニースがカンヌあたりへ来るらしかつたが、「英國はひどく寒い」と云つて嘆息を洩らしてゐた。ところで、さういふ風にヨーロッパ人が皆憧れてゐるニースの空の青さ、いふものはわれ／＼日本人にはさほど珍らしいものではない。なるほど今朝起きて見ると、一天くまなく青々と晴れ上つてゐた。しかしそれはわれ／＼が日本で好晴の日に日なたほつこをしながらか見慣れてゐる空である。日本ではさういふ日でもひるすぎになると曇が出て来て、きれいな空は永く續かないではないか、といへばいいが、こゝだつて同じことで、今日は午後二、三時頃から

空がすっかり曇つてしまつた。

しかし日本と違つてゐる、日本よりも暖かだ、と思はせた點が二つある。今日は朝食後海岸へ出て、ふら／＼と昔の城の跡へのぼつて見たが、驚いたことには風が殆んどない。さうして日光の直射の力が日本でよりも強い。日なたでは「暖かさ」ではなく「暑さ」を感じさせられる。外套は勿論暑く着てゐられない。シャツは薄毛の十分である。緯度で云へば北海道の北端と同じ位で、太陽は南へずつと低くなつてゐるのであるが、それでゐてこのやうに暖かいのは、風のないことと、空氣中の濕氣が少ないことによるのである、風のない日ならば、これ位暖かであるかい、風のない日ならば、これ位暖かであるかも知れぬが、どうも私の感じではそれ以上に暖かなやうである。この土地には椰子など熱帶植物が植ゑてあるが、それが並木に使へるほど旺盛に育つといふのは、日本と暖かさの質が違ふからであらう。

ニースの町で主要な樹はその椰子である。

海岸通りは立派な鋪裝路で、海沿ひに何哩も續いてゐるが、その海寄りの人道と車道との間に大きい椰子の並木があつて、それが蜿蜒と續いてゐる。二つのキャシノーの間にある海岸近くの公園へ行くと、こゝでも眼立つのは椰子である。馬鹿に幹の太いのである。その傍に松なども植ゑてゐるが、小松でひよろひよろしてゐる。(もつともこの地方の松

が皆さうだといふわけではない。公園の松の木は松ぼっくりは極く小さかつたが、ホテルでストーヴの焚きつけに持つて來た松ぼっくりは、兩手で包み切れなほど大きかつた。)さういふ風に椰子の樹を主導音に使つて、いろいろな熱帶植物が植ゑてある。龍舌蘭らしいものや、アナナスに似た葉の大きい熱帶植物なども無暗に澤山芝生のなかに並んでゐる。

これは今まで見て來たリヴィエラの自然の風景ではない。人工的に移植して作り出したものである。そのやうにニースの町全體がひどく人工的で、大都會の一部分をそっくりこゝへ持つて來たといふ感じである。海岸へ來たとか、自然の中へ出て來たとかいふ氣持はちつともしない。リヴィエラ特有の氣分などといふものは何處にあるのか解らない。

せめて城山へでも昇つて見たら何かあるだらうと思つて、椰子の並木のはづれから石段を傳つて山の上まで行つて見た。十八世紀にあつたといふ城の痕跡などは殆んどなく、やはり椰子や熱帶植物の公園になつてゐる。そこへ昇つて何よりも嬉しいと感じたのは、久しぶりで砂まじりの土を踏んだことであつた。もう一つは、町を超えて遠く山々を見晴らしたことであつた。近くの低い山々の上には點々として別荘らしい建物が見えるが、その上に、多分海岸アルプスであらう、相當に高い山脈が蜿蜒として連つてゐる。他方は色の鮮やかな靜かな海である。やつぱり美しい

景色といはなくてはならぬ。がそれは伊豆あたりの景色とはつきり違ふ。こちらの方がずつと綺麗である。野趣とか、鄙とかといふ言葉で現はしてゐるやうな要素、自然の荒々しさに基く不規則性、さういふものがこゝにはないのである。一言でいふと、景色全體がいかにハイカラなのである。

今晩は特別の料理とはなかつたが、それでもクリスマス・ブッディングを付け、メヌを綺麗に印刷し、一々のテーブルにその客の國の國旗を立てた。イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリアなどの旗が見えた。生憎日本の旗がないと云つて、ホテルの主人が頻りに云ひわけをした。

この主人がわれ／＼に大變愛嬌をふりまぐばかりでなく、泊り合せてゐたイギリスの爺さんが二人、頻りにわれ／＼に話しかけた。一人は、「五十年前、君たちのまだ生れてゐない時分に日本に行つた」といふ人、もう一人は一八九五年に日本へ來たといふ人、いづれも日本を知つてゐるので、われ／＼に親しみを感したのであらうが、しかしかうして話してゐると、だん／＼リヴィエラ特有の氣分が解つてくるやうに感じられた。それは町の外形に現はれるやうなものではなく、ヨーロッパの各國から集まつて來た人々の間に醸し出される國際的な氣分であるらしい。これはもつとゆつくり滞在してこの地の生活に浸り込